

1 はじめに ～研修主任として心掛けたこと～

本校は毎年、県内外の先生方に参加していただく公開研究会を開催している。本校に着任して4年目となる今年度、この公開研究会の企画運営を担う研修主任を務めることになった。ここでは、研修主任として「何を大事にして研修をデザインしたか」を主軸に実践をまとめる。

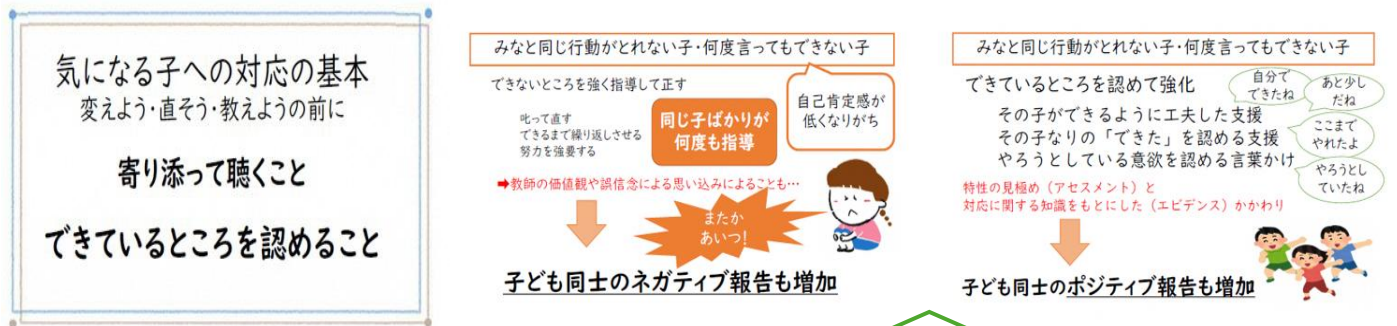
根幹にある思いは、【子どもも先生方も元気な学校（学校のウェルビーイング）】を実現させたいということである。子どもたちも先生方も、互いの個性や特性を認め合い、活かし合える学校文化を醸成するために、自分ができることは何だろうと自問と行動を繰り返した。その際に心掛けたことは以下の3点である。

- (1) 「観」を見つめる研修 (2) 子どもの姿を重視する研修 (3) 先生方が安心して挑戦できる研修

2 実践の内容

(1) 「観」を見つめる研修

【学校のウェルビーイング】の実現には、【多様な価値観の許容】が必須だと考える。教師がもつ「観」は、授業づくりや子どもとの関わり方に大きく影響するためだ。親和的な学級づくりの基盤にある「多様な価値観がある」ことを大前提に、「多様な価値観があってよい」という構えでいることで、他者を受け入れる器が大きくなるはずである。先生方においては、個々のキャリアの中で自身の指導観を創り上げている。先生方のもつ指導観のよさを重ね合わせながら、学校としての合意形成を図り、納得解を見出していく姿勢を大切にしたい。先生方が自分の「観」を見つめ、気づきを得られる時間になるような機会を校内研修の中に意図的に設定した。



研修だより No.4 R7.6.4

「(坂本先生より) 子どもも変わり、先生も変わる授業」を

6月になりました。今月は要請訪問があります。要請訪問1では、各部会で授業を通して今年度の研究の方向性を確認することが1番の目的です。【ききあう・つながる・みつめる】子どもの姿を具現化できる授業を考えていきましょう。

子どもが主体的に学習に向かうと、一人ひとりの学び方が表れるため、多様な行動・しぐさ・表情が表出してくるかと思います。子どもが深く考えたと、沈黙の時間となったり、言葉ではうまく表現できないことがあったりします。私たちは、【待つ・寄り添う・任せ】を徹底

しましょう！決めたゴールに先導するのではなく、子ども達の考えをつないでいった結果にたどり着いたところをゴールとしましょう。ゴールの方向がプランと違ってしまったら、なぜそうなったのかを考えて今後に活かしましょう！

鶴城小学校の目指す研究は、プラン通りに行えたかどうかを評価する研究ではありません。子どもに寄り添っていった結果、プランとは違う授業になってしまった・・・となった時、子ども達は授業から何も学んでいないのでしょうか。子どもは立派な学習者です。子ども達にとっては立派な学習です。だれがどのような学びをしていたのかを協議して深め、私たち教員も授業力を高めていきましょう！

第2回 QU 伝達講習・分析会

子ども観・指導観を見つめる時間に。

「できないことを直そう・変えよう」とするのではなく、「できるように環境や支援を工夫していきましょう」と伝達。

資料：会津若松市第2回 Q-U 研修会より

要請訪問が間近になった時期、指導観・授業観を捉え直す機会になれば…と考えて作成した研修だより。教師が形を整える授業を目指さなくてよいというメッセージを込めて。

(2) 子どもの姿を重視する研修

① 事後研究会 ～子どもの学びの姿を軸に授業について語り合う～



本校の事後研究会「子どもの学びにかえる会」は、指導案通りに進めることができたかを評価する見方ではなく、参観者がみとった子どもの学びの姿を軸に、授業者がみとりきれなかった子どもの姿を語り合うことで、児童理解を深め、今後の授業や支援に生かすことを目的としている。「授業者がこの子の心が動くのはどんな時かな、この子のことをもっとよく知りたい」と思う児童を「より深くみとりたい児童」として授業案の座席表に太字で示すこととした。また、協議の視点を「子どもの学ぶ姿」の1つに絞った。これらのことにより、子どもの具体的な学んでいる姿が明らかになり、効果的な教師の手立てや発問について検討することができた。

(2) 「学びの伴走者【待つ・寄り添う・任せる】」として、子どもと関わる授業づくり

教師の「解説」「教え込み」ではなく、育てたい資質・能力を土台に、子ども自身が教材の中に問いを見出せるように仕掛け、コーディネートしていく授業を目指して研修を積んでいる。令和7年度は、子どもの学びの伴走者としての心得として【待つ・寄り添う・任せる】を掲げ授業を行った。以下に理科の実践を紹介する。

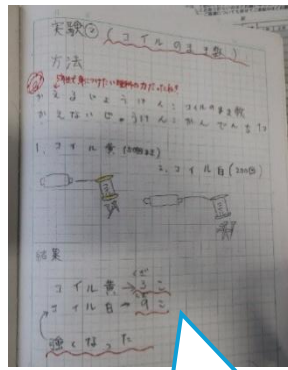
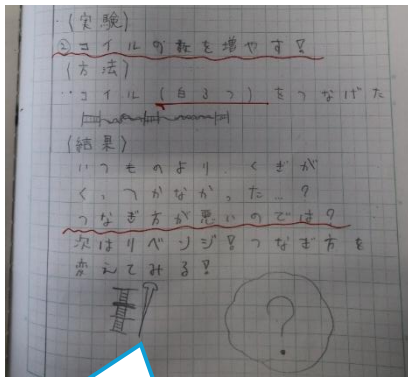


5年生理科「電流がうみ出す力」より

ごみ処理場で使われている電磁石は、330 kgの鉄を持ち上げることを知った子どもたちは、自分達が作った電磁石を強くする方法を考え始めた。児童から出た予想は以下の4つだった。

【児童から出た予想】

- ① 電池の数を増やす
- ② コイルの動線の巻き数を増やす
- ③ コイルを大きくする
- ④ コイルの数を増やす



電磁石が強くならなかった。実験のやり方に問題があったのかもしれないと考え、次の時間にやり方を変えて再び試す児童もいた。

5学年で身に着けさせたい「条件を制御する」視点をもって実験に取り組む児童のノート。

4時間の実験時間を確保し、その中で一人一人が調べたい予想を選び、解決方法を発想して実験を行わせた。困ったことがあったら自分から友達や先生に助けを求めるように指示した。1時間目の実験で黙って席に座っていたS男。S男の課題は、自分から動くことだった。私は、S男に自分で実験を進める力を育みたいと思い、S男を「待つ」ことにし、様子を見ていた。振り返りの時、S男は大粒の涙を流した。「きっと悔しい気持ちの涙だね。次の時間

どうする？」と聞くと、「分からなかったら自分から聞きに行く。」と答えた。「分かった。今日の気持ち、振り返りに書いてほしい。大事なことを学べたね。」と声を掛けた。2時間目の実験で、S男は「先生、実験のやり方を教えてください。」と自分から動き、一緒に実験の見通しを立てた。子どものつまずきを取り除くのが教師の役割であるが、教師の意図的に「待つ」ことにより、S男の学ぼうとする力を引き出すことができた。学びの伴走者の在り方は、子どもの学習意欲や学び方に大きな影響を与える。

(3) 先生方が安心して挑戦できる研修

子どものうまくいかないことや失敗，迷いを歓迎する姿勢を基盤とした先生方の人柄やよさが活かされる授業づくり，先生方がやってみたいことに挑戦できる研修の在り方を模索した。先生方の実践を【評価】するのではなく，【意味づけ・価値づけ】することを大切にしたい。

研修だより No.6 R7.6.25

要請訪問！ びっこ・国語・通級部授業レポート

1年生
 ←朝顔の葉っぱを両手ではさみ、感触を確かめています。→教室に戻る前に昇降口で書き出す2人。早く記録したい気持ちが伝わってきます。子ども達の言葉を1つ1つ受け止める明佳先生。だから安心して話せるのだと感じました。

5の2
 ←子ども達が自主的に伝統工芸品を持ち寄っています。熱の高まりが分かります。→100円ショップの器を1歳から使い続けているというY君に驚きの声がある。ものの価値や愛着への捉えが深まりそうです。

3の2
 ←ペアでの伝え合いの場面。T君の考えにじっくり耳を傾けるHさんの姿。→子ども達の顔を見てじっくり話を聞く美妙希先生。板書についても「今日は何を書けばいい？」と最初に子ども達に聞き、板書の在り方を模索中です。

5の1
 ←自分の立場を明らかにしてから話し合いに入ること、友達の話を知りたいという気持ちが高まりました。→教材文の内容が難しいと感じている実態から、本文や表の指示、ICTなど視覚的なツールを活用し、理解を助けていました。

6の2
 教材文の事例はどんな順番で述べられているのかをロイロノートで並べ替えて考えました。→画面を共有した場面。友達の考えが気になって、集中力がぐっと高まった瞬間。自然と比較を始め、もっとじっくり見たいと声が高まりました。

2の2
 ←スミリーはどんな感じで考えたのかを動作化した場面。うんと考えている感じをよく表現できています！→席を立ち、身を乗り出して確かめたいものがあるR君。子どもが動く瞬間は、子ども心が必要瞬間。

3の1
 ←主人公の気持ちが大きく変化した場面を1の場面から読み直して探そうとR君の姿。→子ども達と目標を同じくするほく美先生。授業中、子どもに声をかけたり、ノートをのぞき込んだり、教室を動き回って子どもに必要な支援を働きかけ続けていました。

ことば (中村先生)
 ←表の見方を助けるツール「ここだよ！定規」を用いて、自分の力で問題が解けるように支援しました。→最後にスタンプを選んで押したRさん。自分に合った言葉を選択することで、自己評価をし、達成感を味わうことができました。

まなび (和田先生)
 優しく輝く人になりたいY君。優しい人だったらどう行動するかを考えました。担任のほく美先生も授業を参観し、かえる会ではY君の学級の姿も踏まえて話げられました。Y君の優しい行動が見られた時に、みんなでほめていこう！となりました。

R7.10.16 六澤先生体育授業【初任者研修授業④】2校時目

六澤先生の工夫がいっぱい！



場の設定がいいね！

- ☆ わくわくする！
- ☆ 挑戦したくなる！
- ☆ 楽しみながら技能を身につけられる！
- ☆ 「ジャングルエリア」などの名前の工夫も！

仕掛けがいいね！

- ☆ 見てほしい動きのポイントを写真で視覚化
- ☆ 互いの声かけの例を視覚化
- ☆ 並んで待てるように場所を視覚化！



片付けへの配慮がいいね！

マットを持つ人数、片付ける場所等、安全や動線に配慮された指示で、片付けの合図が出ると、すぐに自分たちで動いていました！



美しく並んだ上履き！いいね！



子どもの学ぶ姿を軸に、要請訪問や初任者の先生の授業をレポートした。私が捉えた瞬間を切り取り、意味づけ・価値付けを行った。

公開研究会が近づく中、授業作りに悩む先生方の姿が見られた。日々、一生懸命子どもたちや授業と向き合っている先生方に自信をもって当日を迎えてほしい！という思いを込めて書いた研修だより。

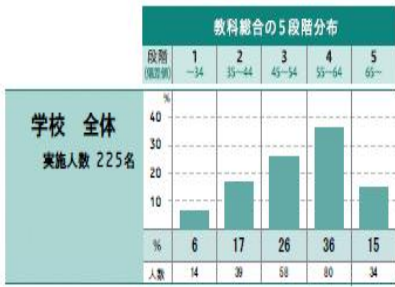
研修だより No.11 先生方へ

いよいよ明日が公開研究会ですね！
 明日はもうやるだけです！不安なら、今日は諦めて寝ましょう！もう大いに失敗しましょう！
 「よくやった！いい経験になったね！」と自分をほめてあげましょう！ごちゃごちゃした授業、研修主任は大歓迎です！子どもがいきいきしている証拠ですよ！コーディネーターがうまくいかなかったら、指導主事や参観者の方からご意見いただいて、勉強しましょう！
 今までやってきたことは、絶対に表れます！子ども達は裏切りませんから！明日いい顔で学校に集まりましょう！

3 成果と課題（○成果 ●課題）

研修主任として3つの視点で取り組んできたことの成果と課題を、「子ども」と「教員」の両面から順に述べる。各種調査では、以下のように先生方の指導の効果が表れている。

（1）各種学力テストの結果から（子どもの姿）



< NRT テスト結果から >

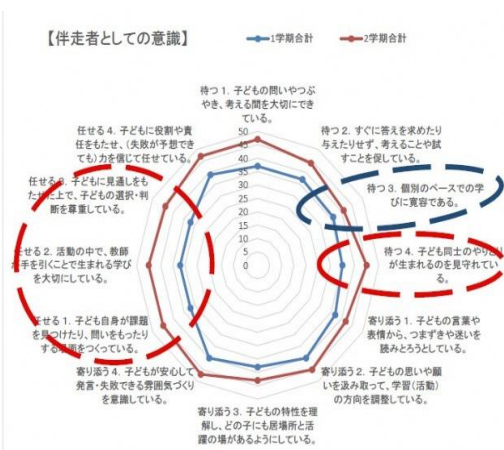
- 「4段階」の児童の割合が多い。どの学年も1年生からの変容を見ると、学年が上がるにつれて、3・4段階へ移行する児童が増えている。
- 一方で、1, 2段階から抜け出せずにいる児童が一定数おり、学習への意欲が大きく関係している。個別指導を意図的に行うとともに、「できた」「わかった」を実感できる指導を継続していく必要がある。

< 全国学力・学習状況調査の結果から >

- 3教科とも、平均正答数・正答率・中央値・標準偏差において、全国と県の値に比べて並みか高い傾向。
- 記述による正答率が全国・県の値と比較すると高い傾向にある。また、無回答が少ない。
- 「主体的・対話的で深い学び」が児童の実感として表れている。
- 「主体的な学習の調整」と「自己有用感等」の数値が高い。
- 自分の考えを書ける子と書けない子の2極化がうかがえる。使える語彙を増やしたり、自分の思いを適切に表現したりする「書く力」を育てるために、授業の振り返りの時間等で書くことが苦手な子への個別支援を行いたい。

（2）教員の姿から

- 事後研究会「子どもの学びにかえる会」では、視点を1つにしたことで、子どもを主語にする協議が更に根付いた。授業者が捉えきれなかった新たな気づきを共有したり、話題となった子どもの学びや児童理解を深めたりするのに有効であり、「子どもの姿をどう捉えるか」を考える文化が更に醸成されている。



< 教員の意識調査より >

- どの項目も1学期より意識が高まった。特に、「待つ4」「任せる1・2・3」の項目の伸びが大きかった。特に、「任せる」の3項目は、2学期は数値が大きく伸びたことから、教員の意識の高まりが分かる。
- 1, 2学期ともに数値が低く、伸びが少なかったのは、「伴走者としての意識」の中の「待つ」の「3. 個別のペースでの学びに寛容である。」の項目だった。学級の中では、まだまだ全児童が同じ内容・量のもを同じ時間・作業スピードで取り組むことを

求めがちであることがうかがえる。教員はどの程度個別のペースの学びに寛容になるべきかという点で迷いが生じているといえる。

⇒伴走者の心得として【待つ・寄り添う・任せる】を掲げたが、基準が曖昧で感覚的であった。伴走者の在り方を、「子どもへの態度や感覚」から捉えるものではなく、「具体的な行動基準・指針」に方向転換を図る。

4 おわりに

研修が「評価される場」から、「語り合える場」に、「イベント」から「日常」へもっと近づけていきたい。「公開研究会に向けて」ではなく、「子どもたちのために」が研修の本質であり、教員の原動力であることを、自分の言動を通して教員に伝える努力をしていきたい。